

アダプテーションと〈文化の盗用〉

— ヴァレンティノのCM炎上と映画『草迷宮』をめぐって —



はじめに

〈文化の盗用〉は Cultural Appropriation の訳語。

ある文化圏に属する者が、他の文化圏の文化財を流用することを意味する。

哲学的観点から〈文化の盗用〉を論じたジェームズ・ヤング (James O. Young) は、〈文化の盗用〉という概念の出発点には「a culture owns some work of art or an artistic element (訳: 文化は芸術作品や芸術の構成要素となるものを所有する)」※1 という発想があると述べている。

※1 Young, O. James (April 2008) . Cultural Appropriation and the Arts (『文化の盗用と芸術』) Blackwell Publishing, p.22-23

文化をまたいでの内容の盗用は芸術作品においてとくにありふれている。ピカソはアフリカ彫刻からモチーフを借りて『アヴィニヨンの娘たち』を描いた。黒澤明はシェイクスピアの『リア王』からプロットを借りて『乱』を撮った。

渡辺一暁「文化的盗用——その限界、その分析の限界——」(『フィルカル 分析哲学と文化をつなぐ』3-2、2018年9月) p.36

問題提起

アダプテーションは〈文化の盗用〉か？

アダプテーションは文化の混成を意識的に組織し、新しい価値を創出する行為。

→ある文化財を別の文化圏のコンテクストに置き、脚色/脱色する行為 ≡ 〈文化の盗用〉的行為といえるのではないか？

目的・方法

目的 アダプテーションと〈文化の盗用〉をわかつ基準を探る。

方法 寺山修司監督映画『草迷宮』の翻案であるヴァレンティノのCMをめぐって生じた〈文化の盗用〉の議論をとりあげ、消費者が〈文化の盗用〉と捉えた要因を明らかにするとともに、CMのアダプテーション作品としての価値を問う。

1 冒涇と敬意

映画『草迷宮』

1979年6月公開 監督・台本: 寺山修司/プロデュース: ピエール・ブロンベルジュ (Pierre Braunberger)

撮影: 鈴木達夫/音楽: J・A・シーザー/出演: 三上博史、若松武、新高恵子、富家美峰、伊丹十三他

- 『アンダルシアの犬』のプロデューサーであるブロンベルジュが〈誘惑〉をテーマに、オムニバスの短編映画集として制作したうちの1本。
- ストーリーは、亡母の口ずさんでいた手塚の歌詞を探して旅をする青年・明の物語と、厳格な母と蠱惑的な美女・千代女のあいだで危うく揺れる少年・明の物語を交錯させつつ展開する。

2021 春夏コレクション「ヴァレンティノ コレツオーネ ミラノ」CM

2021年3月16日公開 (同月30日に削除) 監督: ピエールパオロ・ピッチョーリ (Pierpaolo Piccioli) モデル: Kōki,

- 2021年3月16日、ヴァレンティノの公式インスタグラム (@maisonvalentino) と公式ツイッターアカウント (@MaisonValentino) に投稿された。
- 写真、動画共に映画『草迷宮』をオマージュした翻案作品。
- このCMがSNS上で炎上。ヴァレンティノはツイッターで謝罪文を発表。CMを削除した。

日本人のモデルを起用し、日本で撮影を行ったビジュアルにおいて、モデルが着物の帯を思わせる布の上に座る、または歩く、靴を履いて家の中にいるシーンが登場します。これらのビジュアルは日本の文化に敬意を込めて作成されたもので、日本の文化を冒涇するような意図は全くなく、このシーンで使われた布も、着物の帯ではありませんが、多くの方を不快な思いにさせてしまったこと、深くお詫言申し上げます。

ヴァレンティノ公式ツイッターアカウントによるツイート、2021年3月30日

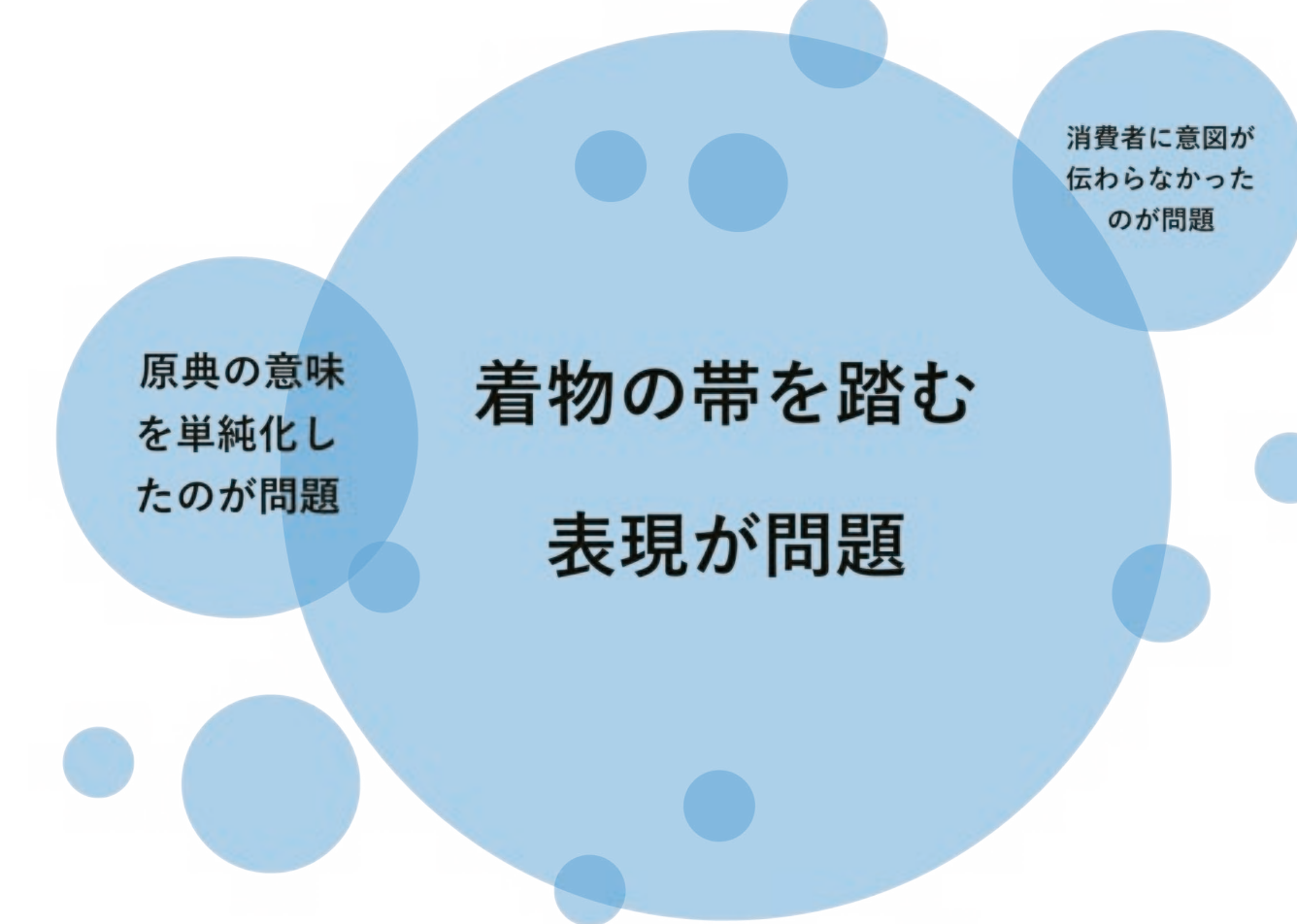
https://twitter.com/Valentino_Japan/status/1376886944970383363?s=20 (最終閲覧日: 2022年3月8日、以下同)

消費者はどのような表現を冒涇と捉えたのか? — ネットニュースの分析

CMの問題点を分析しているネットニュース※2は、問題点別に大きく3つにわけられた。

※2 検索にあたっては、個人経営のブログやまとめサイト、またはそれに準ずるものは除いた。以下一覧。Business Journal、FRONTROW、HUFF POST、J-CAST ニュース、Japan Today、News Week Japan、WWDJapan、京都新聞、週刊女性PRIME、デイリー新潮、ねとらぼ、文春オンライン (計12件)。

ほぼ全記事が着物の帯を踏む表現 (以下、帯踏み) に批判が集まったと分析。



3月、一つの動画が日本で炎上した。イタリアの高級ファッションブランドのヴァレンティノの動画だ。モデルの日本人女性 Kōki が畳の上で靴を履いている。着物の帯を連想される長い生地の上を靴で歩く。そんなシーンがあった。

これが文字通り「日本の文化を踏みにじった」と解釈されたのである。

安西洋之「ヴァレンティノの動画が“炎上”異文化にからむ地雷」サンケイビズ、2021年4月30日

<https://www.sankeibiz.jp/workstyle/news/210430/cpd210430060001-n1.htm>

制作者の敬意が、消費者には冒涇として伝わった?

→ 帯踏みは、映画『草迷宮』のシーンをオマージュしたもの。【画像1】

消費者は帯を踏む行為を冒涇だと思い、制作者は映画に準ずることを敬意だと思った。

【画像1】映画『草迷宮』の帯踏み『草迷宮』DVD、紀伊國屋書店、2003年より



2 擁護される『草迷宮』

帯踏みという〈誤表象〉※3をどのように評価すべきか?

※3 〈文化の盗用〉を論じた先行研究やニュースではたびたび〈誤表象〉(misrepresentation) という語句が用いられており、他人の誤解を招くような表象をすること、物事を事実とそぐわない形で表現していること、といった意味が与えられている。本発表では先行の用法に則って〈誤表象〉を“通例から逸脱した表現”という意味で用い、文学研究での用法との異なりを示すために山括弧を付した。

先に帯踏み演出を使ったのは日本国籍を持ち、日本文化圏内で生活してきた寺山修司。

→ 作品が生成のコンテクストから切り離された結果、〈文化の盗用〉という枠組みが喚起されている。

渡辺一暁が挙げる〈誤表象〉の2点の“まずさ”

1. ある文化に属する者に対して誤解を招く表象をすることでヘイトスピーチが煽られる

2. インサイダーの産物であればもっと美しい結果をもたらす表現技法をアウトサイダーがへたに用いることで美的価値が損なわれる

本質主義に陥る危険性
ナショナリズムとの親和性

→ 〈文化の盗用〉〈誤表象〉が生じる原因は、グラデーションであるはずの文化の輪郭に線引きをし、インサイダー/アウトサイダー、真正な表現/〈誤表象〉をわけることにあるとも言える。

3 アダプテーション作品としてのCM

帯踏みを考える① — 映画における帯の意味

映画では帯というモチーフが明の母胎回帰を表す。

寺山映画の末尾において、明青年が黒門屋敷に入り込むのは「子宮」への回帰を、明少年が溺死したのは「羊水」への回帰を意味する。

劉夢如「寺山修司監督映画『草迷宮』論——〈母〉去りて手塚ころがる魔界へと分裂しつつ夢見る〈私〉」『国文学研究ノート』2016年3月、p.90

→ 少年・明が溺死するシーンでは帯が登場する。川という羊水のなかで臍帯によって母と結ばれる。

帯踏みを考える② — CMにおける踏む主体の変更

男性が女性を性的な対象としか見られないという文化の象徴が「帯掛け」であるならば、今回のCFにおいて、女性の Kōki さんが帯を踏んで歩くというのは、アジアの女性が自分たちが「性的な対象として消費されるのを拒否する」という意味が込められていると考えられます。

冷泉彰彦「ヴァレンティノ炎上CMで、踏まれているのは「帯」なのか「布」なのか?」ニュースウィーク日本版、2021年4月1日、https://www.newsweekjapan.jp/reizei/2021/04/cm_2.php

→ 帯踏みの主体が女性に改変されたことで、フェミニズム的主張が盛り込まれたという読解。

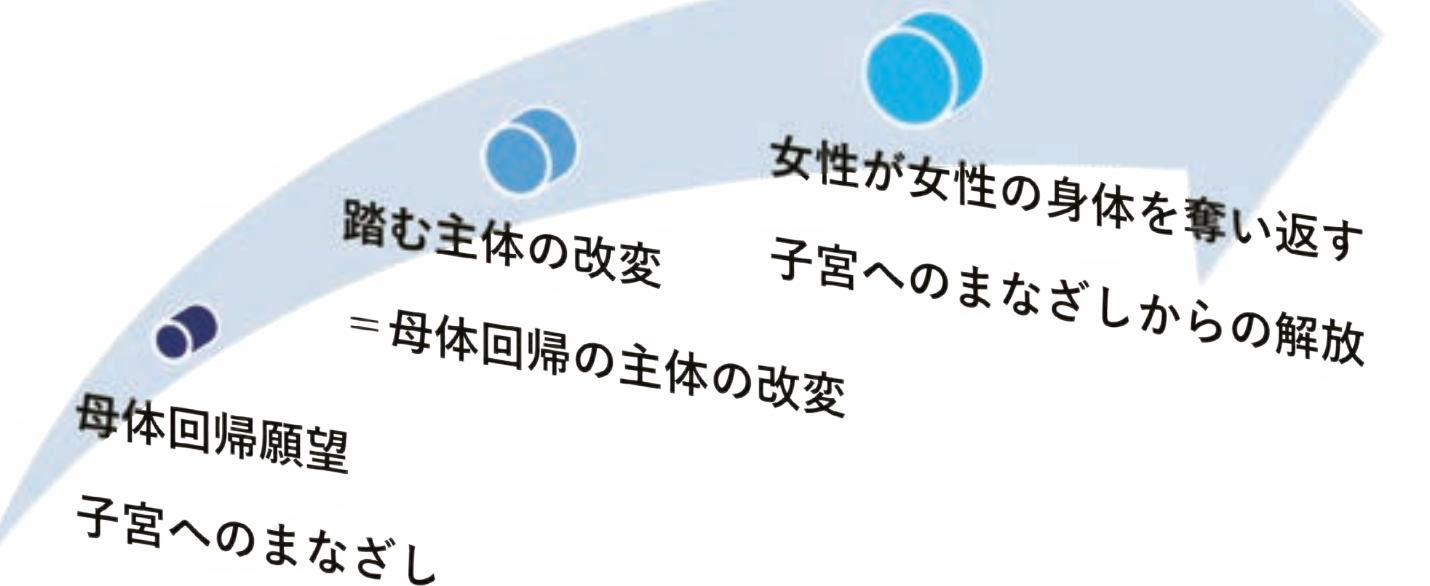
改変が生んだフェミニズムの文脈

映画において、帯は母体回帰や子宮を象徴。

CMでは、帯踏みの主体が女性に改変された。

→ 映画において聖性/魔性の象徴であった子宮は

CMでは男性のまなざしから解放される。



CMが継いだ映画の〈誘惑〉

映画では、青年・明が美登里に誘われて妖怪の跋扈する部屋へ迷い込んでゆく。【画像2】このシーンについて、寺山は「旅する少年を手塚をつきながら亡霊屋敷に誘いこむ幻の少女も、十二、三歳の「この世ならざる」裸体がほしかった」※5と述べている。

※5 寺山修司「映画『草迷宮』の出来るまで 鏡花美学のディスカール」『キネマ旬報』773号、1979年11月、p.102

CMでも、モデルは手招きをして誰かを〈誘惑〉する。だが、その〈誘惑〉の対象は消費者(ヴァレンティノの商品を求める女性を中心とする人々)。

→ 映画において〈誘惑〉の道具だった女性の身体は、

CMでは衣服を魅力的に纏う主体として立ちあがる。

衣服による自己演出の世界へと消費者を〈誘惑〉する。

【画像2】映画『草迷宮』の〈誘惑〉『草迷宮』DVD、紀伊國屋書店、2003年より

おわりに

CMの評価

観点① 販売促進用コンテンツとして

- 消費者に好感を与えるという点では、炎上という結果を見る限り失敗。
- 帯(に見える布)を踏む演出は、アパレルブランドのCMとして不適切。
- 消費者を〈誘惑〉するコンテンツで〈誘惑〉をテーマにした映画をオマージュしたことは理にかなっている。

観点② アダプテーション作品として

- 映画『草迷宮』を男性登場人物(明)の側からのみならず、女性登場人物たちの側から捉え直せる可能性が示唆されている。

読みのコードとしてのアダプテーションと〈文化の盗用〉

読みのコードとしての〈文化の盗用〉

複雑なコンテクストを〈文化の盗用〉の枠組みに収める線引きの力学

読みのコードとしてのアダプテーション

単純化されたコンテクストに注目して生まれる再接続・再解釈の力学

→ マジョリティが〈文化の盗用〉という語彙をマイノリティへの抑圧に

使うとき、対抗できるのがアダプテーションという読みのコード。

反対に、アダプテーションがマジョリティの武器になるときは、

〈文化の盗用〉という読みのコードが抑止力になる。

〈文化の盗用〉とアダプテーションは相剋関係。

研究の際は、両側面の検討が必要。

